

トマス・アキナス『ボエティウス「三位一体論」 註解』における学問方法論

著者	桑原 直己
雑誌名	倫理学
号	28
ページ	1-16
発行年	2012-03-20
その他のタイトル	The methodology in the “Expositio in Boetii De Trinitate” of Thomas Aquinas
URL	http://hdl.handle.net/2241/117147

トマス・アキナス

『ボエティウス「三位一体論」註解』における学問方法論

桑 原 直 己

【1】はじめに

トマス・アキナスの『ボエティウス「三位一体論」註解』（通称 *Expositio in Boetii De Trinitate*、以下 EBT と略記）と題する小品^①は、トマスの学問論がまとまって展開されている重要なテキストである。そこで展開されている学問論は、トマスの主著として知られる『神学大全』（以下 ST）全体の内容である「聖なる教え *sacra doctrina*」そのものの性格をその冒頭において規定している ST I q.1 に直結するものである。

ところで、この EBT は「註解」としてはきわめて特異な特徴を示している。まず、ボエティウス『三位一体論』そのもののテキストは序と六つの章からなるが、EBT では序と第一章と第二章の前半までしか註解していない。その限りで明らかに未完の書である。さらに、トマスの註解書は普通、対象となるテキストを細かく「講 *lectio*」に区分し、これに詳細な解説を

施してゆくのが常であるが、この EBT では、序と第一章と第二章とにそれぞれ簡潔な註解を施した後、そのそれぞれに「異論、反対異論、主文、異論回答」といういわゆる「討論集形式」による「項 *articulus*」からなる「問題 *quaestio*」が二つずつ配されるという二重構造を示している。

EBT の論述は高い完成度を示しており、その内容も「註解」という形式を借りながら、自らの「神学序説」を展開する^②ものである。ここから現在では、EBT は「註解」と称してはいるものの、むしろトマス自身の学問論の構想を明らかにすることを目的とした著作と見る見方が有力となっている。こうした視点から見ると「註解の講」と「討論の項」という二重構造も、その目的のために意図的に採用されたことになる。さらに、EBT がボエティウス『三位一体論』の註解としては途中中断の形になっているのも、トマスがそこまで所期の目的を達成したと判断したため、ということになる。

筆者は、トマスの学問論を解明するために、EBTの意義を検討する一連の論攷を企図している。本稿では、特にトマスの学問方法論が展開されている第六問題を取り上げ、トマスが「神学」の方法をどのように特徴づけたのかを検討する。

〔2〕EBTの全体構成と第六問題の位置づけ

まず、本稿で検討する第六問題の位置づけを明らかにするために、EBTの全体構造を概観することとしたい。

EBTの全体は、まずトマス自身が付した序文⁽³⁾からはじまる。長倉久子はこの序文に注目し、そこからトマスが本書全体で明らかにしようとする問題に対する示唆を見て取っている。すなわちそれは、(一)人間の自然本性的認識一特に真理と神の認識に関しての可能性と限界、(二)信仰と理性との関わり、(三)信仰の正当性と正統性、(四)知恵の探求の営み(諸学)における「神学」の位置づけないし哲学と神学との関わりに関する問題である⁽⁴⁾。以下これらの問題が具体的にどのように展開しているかを、EBTの全体構造の中から概観したい。

まず、ボエティウスによる序文の註解からは、(一)真理および神認識に関する人間知性の可能性および限界を明らかにするという、いわば認識論を内容とする第一問題と、(二)信仰に属することがらを理性によって探求し表現することの正当性、つまり学知としての神学の成立可能性とその特殊性を検討する第二問題が提起される。

次いで、ボエティウスのテキスト第一章註解の箇所では第六章から成るボエティウスのテキストを二つの主題に区分する。すなわち、(1)アリウス派の異端に対して父と子と聖霊の神としての同一性ないし神の本質の「性」を論じる第一・第二章と、(2)サベリウスの異端に対して父と子と聖霊の三つのペルソナの問題を取り上げた第三章以下である。この前半(1)の部分はさらに三位一体に関するカトリック信仰が呈示される第一章と、その教説を検討する第二章から構成されている。

この第一章の分析から二つの問題、すなわち、信仰の正当性と普遍性とを検討する第三問題と、三位一体の教説に関する誤謬の起因としての「多の原因」を検討する第四問題が提起される。これら二つの問題が上記(三)に相当する。

第二章は三位一体に関するカトリック信仰の検討を内容とするが、ボエティウスが彼の三位一体論を展開するのはこの章の後半からであり、章の前半部分は、三位一体を主題として考察するに先立ついわば方法的考察である。そしてトマスはこの部分の註解から二つの問題を提起する。すなわち、観照的学の区分とそのそれぞれの部門における対象ないし主題の相違を説明する第五問題と、そのそれぞれの部門に固有な方法を明らかにする第六問題である。これら二つの問題が上記(四)に相当する。

ここでトマスの註解および「討論集」形式の問題は終わるのであり、ボエティウス自身の三位一体論についての展開にはトマスは立ち入ることなく本書は閉じられている。

本稿で検討する第六問題は、第五問題とともにこの最後の部分(四)に相当する。

〔3〕ボエティウス『三位一体論』第二章のテキスト前半

次いで、ボエティウス自身による『三位一体論』の第二章のテキストのうち、トマスの論述が関わっているその前半を引用しておこう¹⁵⁾。このテキストに関連して、本稿で検討する第六問題のテーマが提示されるからである。

ですから、さあ始めましょう。そしておのおのを理解され捉えられうる限りにおいて考察してみましょう。まことに至言なりと思われませんが、学識ある者の務めは、それぞれのものについてそのあるがままに、確信を得ようと試みることなのです。さて、観照的学の部門 *speculativae partes* が三つあります。一つは自然学 *naturalis* であって運動(変化)に関わり *in motu*、切り離されていないもの *inabstracta*、アニムペクサイレトス (*anypexairetos* 分離されないもの)です。つまり、自然学は、物体の形相を質料とともに考察します。この形相は物体から現実には分離されることができません。こうした物体は運動のうちにあるもので、例えば、土は下方に、火は上方に向う場合がそれです。そして質料に結合された形相は運動を有しています。(第二の部門の) 数学 *mathematica* は運動には関わら

ず、切り離されていないものです。すなわちこれは、物体の形相を、質料を排除して、従ってまた運動を排除して、考察します。これらの形相は、質料のうちにありますから、これらから分離されることはできません。(第三の部門の) 神学 *theologia* は運動に関わらず、切り離されているもの、また分離可能なものです。なぜなら、神の実体は質料も運動もないものですから。従って、自然学的なものについては推論的に *rationabiliter*、数学的なものについては学習的に *discipliniter*、神的なものについては直知的に *intellectualiter* 取り扱わなければならないでしょう。また(神的なものについては) 表象に委ねるべきではなく、むしろ形相そのものを考察 *inspicere* すべきでありましょう。

このテキストについてトマスは註解し、その末尾において、「*in*」では、一通りの問題がある。第一は、彼(ボエティウス)がテキストにおいて措定しているところの観照的学の区分についてである。第二は、彼が観照的学の諸部門に帰している方法についてである」と述べ、第五問題および第六問題の課題を引き出している。

【4】第六問題——ポエティウスが観照的諸学に帰属させている諸方法について

第六問題は、この二つの課題の後半、すなわち観照的学の方法を主題としている。第五問題において明らかにされた「自然学」「数学」「神学的」という観照的学の区分を受け、また、ポエティウス自身のテキストにおける方法論的な言葉に解説を施しつつ、これら諸学におけるトマス自身の方法論的な見解を明らかにしている。

(一) 自然学的諸学においては推論的に *rationabiliter*、数学的諸学においては学習的に *disciplinabiliter*、神学的諸学においては直知的に *intellectualiter* 探究される *versari* べきであるか¹⁶⁾。

本項では、「自然学的なものについては推論的に *rationabiliter*、数学的なものについては学習的に *disciplinabiliter*、神的なものについては直知的に *intellectualiter* 取り扱わなければならない」というポエティウスの言葉に導かれ、これら諸学の探究方法が包括的に扱われており、それぞれの学について半ば独立した小項が立てられる形で論が進められている。

(一) 自然学の方法について

トマスはまず、ポエティウスが自然学の方法として言及する「推論的 *rationabiliter*」と言われる探究方法に三通りの区別を設ける。

(1) 第一は、「探究を進める出発点としての諸原理の側から」言われるもの。例えば、ひとが何かを証明するために、「理性の働きの産み出したもの」すなわち「類」「種」「対立するもの」など論理学者たちが考察する概念をもとに進める場合である。この意味で「推論的」と言われるのは、或る学において、論理学で扱われる諸命題を用いる場合、例えば、他の諸学において論理学用語を「説明手段として *logica prout est docens*」用いる場合である。しかし、個別の学においてはその学に固有の原理をもとに探究を進めることが条件となるので、この(1)の探究の進め方は、何か或る特殊な学に固有なものとすることはできない。しかし、(1)の方法を用いることは、論理学と形而上学においては本来的であり、適切でありうる。なぜなら、このどちらの学も「共通普遍的な *communis* 学」であり、或る意味で同一の主題に関わるからである、と言う。

(2) 第二は、「探究の止む終結 *terminus*」よりして「推論的方法 *processus rationalis*」と言われるものがある。すなわち、理性の探究が達成すべき「究極の到達点 *ultimus terminus*」は「諸原理の理解 *intellectus*」であり、これらの諸原理に還元しつつ我々は判断を行う。「諸原理の理解」が達成された時には、その「論法 *processus*」ないし「証明 *probatio*」は、「推論的 *rationabilis*」とは言われず、「論証的 *demonstrativa*」と言われる。しかし、理性の探究はかかる終極にまで到達しえず、探究の途上で止む場合、すなわち、探究者になお、いずれの結論へなりと道が開かれている場合がある。このことは蓋然的な論拠

によって論を進める場合に起こるが、蓋然的論拠は、臆見や所信を産み出すことはできても、学知を産み出すことはできない。こうした意味で、「推論的方法」は「論証的方法」と区別される。この(2)の仕方では「推論的に」探究を進めることはいかなる学においてであれ可能であり、その際には蓋然的なことがらをもとに必然的証明への道が準備される。ここでは「論理学用語が説明に用いられる logica utens」ではなく、「論理学の方法が用いられる logica utens」のである。

(3) 第三に、「理性(推論)的能力 potentia rationalis からして」、すなわち「理性的魂 anima rationalis に固有の仕方に従う」探究の進め方が「推論的」と言われる。この(3)の意味での「推論的方法」は、自然学に固有のものとされる。というのも、トマスは、自然学は、その方法として二つの点で理性的魂に固有の仕方を守っている、と言う。

(3-1) 第一の点は、理性的魂が「我々にとつてはより多く知られるものである」可感的諸事物から、本性的にはより多く知られるものである「可知的諸事物」を受け取るように、自然学は、出発点として「我々にとつてはより多く知られるが、本性的にはより少なく知られる」ことがらを用い、また「しるし」と「結果」とを用いて行われる論証が自然学において最もよく用いられるということである。

(3-2) 第二の点としては、「一つのものから他のものへ動いて行く」という「理性 ratio」の特徴が自然学において最も顕著に見られる、ということである。自然学においては、例

えば「結果の認識」から出発して「原因の認識」に到達するように、或る「一つの事物の認識」から出発して「他の事物の認識」に至る。

ここでトマスは、自然学の方法と数学の方法との相違点に触れる。

数学的諸学は「形相因のみによって」論証するため、数学的諸学においては「事物の本質に属しているもののみを通して論究が進められる」。それゆえ、数学的諸学において或る一つの事物について何事が論証されるのは、「他の事物を媒介として」ではなく、むしろ「その事物自身に固有の定義を媒介として」である。しかし自然学においては、論証が「外的諸原因を媒介として」行われるのであるから、或る一つの事物に関して何事が証明される際には、その事物に対して全く外在的な他の事物を媒介とする。

こうしたわけで、推論的理性による方法は、自然学において最も顕著に看取され、このゆえに「自然学は、他の諸学のうちで、人間知性に最も相応しいもの」とされる。

なおトマスは、「推論的に探究を進める」ことが自然学に帰せられるのは、それが排他的な意味で「自然学にのみ適う」からというのではなく、むしろ「自然学に最も適している」という理由による、として、推論的な探求方法が他の学においても用いられる可能性がある点に注意を喚起している。

ここで注目しておきたいのは、上記祖述で最後に紹介した

点、すなわち「推論的に探究を進める」ことが自然学に帰せられるのは、それが排他的な意味で「自然学にのみ適う」からではない、というトマスの注意書きである。トマスは「推論的」探究の進め方を「理性的魂 *anima rationalis* に固有の仕方に従う」ものとして提示している。その限りで、「推論的」な理性というものが人間の自然本性そのものに固有であることが強調されている、と言ってよい。人間的な自然本性および認識に対するこうした見方は、第一問題でトマスが示した立場の背後に常に窺われた彼の経験主義的な認識論を反映している、と言ってよからう。

（二） 数学的諸学の方法について

数学の方法に関しては、まずトマスは結論を先取りして「学習的に探究を進めることが数学の方法とされるのは、ただ数学のみが学習的方法を採るからというのではなく、むしろこの方法が主として数学に適するからである」と述べる。

「学ぶ」（他人から知識を受け取る）方法は、「確実な認識」つまり「学知」にまで導かれる場面で成立するが、このことはまさしく数学的諸学において最も多く生じる。それは、「数学は自然学と神学の中間にあるものであるゆえ、そのどちらよりも確実であるから」だと言う。

（一）「自然学よりも確実」というのは、数学における考察は運動と質料を捨象しているが、自然学における考察は運動と質料に関わっているが故である。

（二）また数学の方法は「神学の方法よりも」確実性が高い、

とされる。神学が関わることは、「可感的事物からより遠く隔たっている」が、「可感的事物からこそ我々の認識は始まる」のであるからである。他方、数学的対象は、図形、線、数、等々のように、感覚に入り、想像力 *imaginatio* に服するものである。従って人間知性は、諸々の表象像 *phantasmata* から対象を受け取るのであるから、これらの数学的対象の認識は、或る何らかの知性実体の認識よりも、或いはまた実体の何性や現実態と可能態、その他こうした類のものの認識よりも、容易にそして確実に得られる、と言う。

こうしたわけで、数学的考察は、「自然学と神学の考察よりも容易でありかつ確実」であり、また、他の行為的諸学よりもさらに一層そうである、とされ、特に数学が「学習」という仕方での探究を進める、と言われるのだ、と言う。

数学の方法に関しても、トマスは「学習的に探究を進めることが数学の方法とされるのは、ただ数学のみが学習的方法を採るからというのではなく、むしろこの方法が主として数学に適するからである」と述べている。「学習」という方法は、「確実な認識」つまり「学知」にまで導かれる場面で成立し、このことはまさしく数学的諸学において最も多く生じるからだ、と言う。

ここで問題となるのは、「確実性」の意味であらう。数学は自然学と神学のどちらよりも確実であるからだと言う。運動と質料を捨象している数学は、運動と質料に関わっている自然学

における考察よりも確實であるとされる。また、可感的事物からこそ我々の認識は始まるがゆえに、可感的事物からより遠く隔たっているものに関わる神学よりも、数学は確實であるとされる。

ここでも、人間の認識が感覚に基礎を置いている点が問題となり、相対的に感覚的・物質的世界における運動と質料を捨象した数学が「より確實」とされているのである。

(三) 神学的の方法について

トマスは、「直知的に」探究を進めることが神学的に帰属させられるのは、この学において最も顕著に「知性」の方法が看取されるからである、と言う。

(a) 「理性 ratio」と (b) 「知性 intellectus」との相異は、あたかも「多」が「一」から区別されるが如くであって、(a) 「理性」は広く「多くのもの」に関わり、それらの「多なるもの」から「一つの単純な認識」を形成することを固有な特徴とするのに対し、(b) 「知性」はまず第一に「一にして単純な真理」を考察し、この真理において「多なるもの全体」の認識を得る、と言う。

(a) 「推論的理性」による考察は、(1) 「分析還元の道 *via resolutionis*」に従って (b) 「直知的知性による考察」に至って終局を迎えるが、それは、「理性」が多くのものを基に一つの単純な真理を獲得するからである。また、(b) 「直知的知性による考察」は (2) 「結合ないし発見の道 *via compositionis vel inventionis*」に従って「推論的考察」の出発点であるが、

それは、知性が一つのものにおいて多くのものを把握するからである。

トマスは理性による推論における (1) 「分析還元の道」と (2) 「結合の道」との相違を次のように説明する。(1) 前者は、「一つのものから実在的に別の他のものへ進んでいく」道であって、例えば、外在的な原因や結果を通して論証が行われる場合で、原因から結果に進む場合には結合し、結果から原因に進む場合にはいわば「分析還元」が行われる。この道における「還元」が最終的に終るのは、「最高度に単純な最高の諸原因」すなわち「分離実体」に到達する時である。(2) 後者は、「一つのものから概念的に別の他のものへ」と進んでいく道であって、例えば、内在的な原因に従って探究を進める場合で、「最も普遍的な形相」からより「特殊な形相」に進む場合には「結合」する、と言う。

(1) すべての学において行われる「分析還元」の道によって推論を進める「理性」による考察は、すべて神学的知に至って終る。すなわち「最も普遍的なるもの」は、「すべての在るものに共通のもの」であるので、「還元」の最終の到達点は、「在るもの」と、「在るものに在るものたる限りで属しているもの」の考察である。これらのものは、神学的がそれについて考察するもの、すなわち分離的諸実体と、すべての在るものに共通的な諸々のものである。それゆえ、その考察は最高度に「知性的」である、とされる。

(2) 他方、この学（神学的）は諸原理を他のすべての学に

与えるが、それは、「直知的知性による考察」が「推論的理性による考察」の出発点であるからである。そして、この故にこの学は「第一哲学」と呼ばれ、「自然学を超えるもの」という意味で「形而上学」と呼ばれるが、それは「還元」の過程で、自然学の後に来るからである、とされる。

ここでトマスは、「理性」と「知性」、「分析還元の道」と「結合の道」の相違と関係とを明らかにしている。つまり、「分析還元の道」においては「直知的知性による考察」は「推論的理性による考察」の終局であるが、「結合の道」においては、「直知的知性による考察」は「推論的考察」の出発点である、という関係にある。

神の学知は「分析還元の道」によって推論を進める「理性」による考察にとつて終極であるとともに、「結合の道」においては「推論的理性による考察」の出発点である、ということことで「知性」の方法が看取される、というわけである。

(二) 神の諸学においては、表象力 *imaginatio* は完全に放棄されるべきである⁽⁷⁾。

第二項では、トマスはボエティウスの「神的なものについては表象に委ねるべきではない」という言葉を採り上げ、学知を獲得する際における「感覚」と「表象ないし想像力」の役割を検討している。

まずトマスは認識の「始め」は「知覚」に属し、「終り」は「判断」に属している、と指摘する。

(一) 我々のあらゆる認識の「始まり」は感覚のうちにある。表象像は、人間の知性的魂にとつて対象のようなものであるので、人間による認識は、感覚による知覚から表象力による把握が生じ、さらに表象力の把握から知性による把握が生じるという形で進むからである。

(二) しかるに、認識の「終り」は常に同じであるわけではなく、(2-1) 自然学においては感覚において終り、(2-2) 数学においては表象力において、さらに(2-3) 神的な学においてはただ知性のみにいて終る。

(2-1) 感覚によって明らかにされる事物の諸々の固有性と附帯性が「事物の本性」を十分に現し出しているような場面での認識においては、知性がなす「事物の本性についての判断」は感覚が事物について明らかにするところのものと合致しなければならぬ。自然的事物が可感的質料に限定されているので、自然的事物についての認識はすべてこうしたものである。それゆえに、自然学においては認識は感覚で終極すべきである。トマスは「自然的諸事物に関して感覚をないがしろにする人は、誤謬に陥る」と注意している。

(2-2) 或る事物について為す判断は、感覚によって知覚されるところのものに依存しない。(事物が) 現実にある場合には「可感的質料」のうちにあるが、「本質」を定義する上では可感的質料が捨象されているからである。ところで、いかな

る事物についての判断も主にその事物の定義される「本質」に基づいて為される。ただし、「本質」の定義にあたって捨象されるのはただ可感的質料のみであり、可感的諸条件が除去された後に、何か「表象力に訴えるもの imaginable」が残されている。かかる事物については、判断は表象力が明示するところに基づいて為されなければならない。こうしたものが数学の対象である、と言う。それゆえ、数学的諸学においては、判断に従って得られる認識は「感覚」ではなく「表象力」を終極としなければならない。ここから、例えば「直線はただ一点でのみ球と接する」というような「数学的線」について為される判断は、「可感的線」についての判断と同一ではないことが起こるのである。

(2-3) 神的事情がらは、「存在 esse」に関してまた「考察上」も質料に全く依存しないものであつて、「感覚に入ってくるもの」をも「表象力に入ってくるもの」をも超えている。それゆえ、判断によつて得られるこれらのものの認識は、「表象力」をも「感覚」をも終極とすべきでない。

しかしながら、我々は「感覚や表象力によつて把握されたものを出発点として」これらのものの認識に到達する。具体的方法としては「原因性の道」によつて「果」から「果とは同じ尺度をもたずそれを超えている原因」を考察するか、或いは「超出」また「除去」によつて、「感覚や表象力の把握する一切のもの」を「分離する」ことによる。

それゆえ、「神的事情がら」に関して、「感覚」も「表象力」

も(1)我々の「考察の出発点」としては用いることができるが、(2)それらを「終極」とし、「神的なるもの」が感覚や表象力の把握するようなものであると判断してはならない、という結論となる。

諸学についてまとめると、(2-3)神的事情がらに関しては、我々は表象力にも感覚にも向かつてはならず、(2-2)数学的諸学においては、表象力には向かうが、しかし感覚に向かつてはならず、(2-1)自然的諸学においては、感覚にもまた向かわなければならない。その上でトマスは「観照的学知のこれら三つの部分に関して同じ方法で探究をしようと努める者は、誤りを犯す」と注意している。

(三) 我々の知性は神的形相そのものを透察 *inspicere* し得るか⁽⁸⁾。

第三項および第四項は、「形相そのものを考察 *inspicere* すべき」である、というボエティウスの言葉に導かれているが、ここでトマスは人間による神的形相の認識可能性そのものを検討している。まず第三項で、そもそも我々の知性は神的形相そのものを透察しうかが問われる。

まずトマスは「何か或るもの」についての二通りの認識の様態、すなわち、(1)それについて「在るか」が知られる場合と、(2)それについて「何であるか」が知られる場合とを区別する。ところで、(2)何か或るものについて「何であるか」を知

るためには、我々の知性はそのものの「何性」ないし「本質」にまで(2-1)直接に、または(2-2)「そのものの何性を十分に明示する何らかのもの」を媒介として導かれなければならない。

まずトマスは、神に関する現世における(2-1)の可能性、つまり、我々の知性が直接に神の本質と他の分離せる諸本質にまで到達する可能性を斥ける。

なぜなら、人間の知性は直接的には「表象像」に対して働くものであるからであり、そのため直接的には「可感的事物の何性」は把握することができるが、「可知的なるものの何性」を把握することはできない。

次いでトマスは(2-2)の可能性について検討する。

「可知的なるもの」ないしは「不可視なるもの」のうちには、その「何性」と「本性」が、可感的事物の知られている諸々の何性から完全に明らかに示されるものがあり、こうしたたぐいの「可知的なるもの」については、我々は間接的にではあるが「何であるか」を知ることでもある。例えば、「人間とは何であるか」と「動物とは何であるか」が知られることから、両者の関係が十分に知られ、このことから「類とは何か」と「種とは何か」が知られる。

しかしながら、知性認識された可感的本性は、神的本質はもとより、他の分離せる諸本質についてすら、これらを十分に明示するものではないとして、神や分離実体についての(2-1-2)による認識可能性も斥けられる。なぜなら、神や分離実体は、

本性的に言って「一つの類に属するもの」ではなく、これらについては「何性」やこれに類する名称も、可感的事物とは「ほとんど同名異義的」に用いられるからである。それゆえ、それら非質料的諸実体は、「類似の道」によつては可感的諸事物から十分に知られることはない。

また神や分離実体は、「原因性の道」によつても知られることはない。なぜなら、それらの諸実体が下位の諸事物に与えた影響は、それら諸実体の力に匹敵する結果ではなく、原因に關して、「何であるか」を知ることのできるほどのものではないからである。

またこれら諸々の非質料的実体に関しては、現世の境遇では、単に「自然的認識の道」によるのみならず「啓示の道」によつても、「何であるか」を知ることではできない。「神的啓示の光線は、我々の在り方に適した仕方です」我々に届くからである。それゆえ、「啓示によつて我々は、啓示によらなければ我々に知られることのないであろう何ものかを認識するまでに高められる」が、「可感的なるものを通す以外の別の仕方では認識するに至る」というわけではない。可感的なものによる道は、非質料的諸実体についてその「何であるか」の認識に關してまで導いていくには十分ではない。

以上から、我々にとつて、非質料的諸形相は(2)の「何であるか」の認識に關しては不可知であり、ただ単に(1)の「在るか」のみが知られる、と結論づけられる。

しかしながら、トマスは(1)の「在るか」についての認識

の成立条件に言及する。すなわち、ものについて「在るか」が知られるのは、ただ何らかの仕方で、そのものについて「何であるか」が、少なくとも「混然とした認識という仕方」で知らなければならない。したがって、神についても他の非質料的諸実体についても、我々が「在るか」を知ることができるのは、ただ我々が何らかの仕方ですれらについて「何であるか」を、混然とした形で知っている場合のみであることになる。

ここでトマスは「混然とした認識という仕方」ということの意味を「完全な認識という仕方」との対比で明らかにする。例えば「人間がいる」ということを知っており、「人間」とは定義上何であるかを探究する者は、この「人間」という名称が何を表しているかを知らねばならない。このことは、「定義」は知らないとはいえ、「人間」についての何らかの先行的な理解がないならば、不可能である。この先行的な理解をトマスは「人間を、(a) 或る最も近い類あるいは遠い類と、(b) 人間を外側から明らかにする何らかの附帯性」とを認識するという仕方、捉えている」とことであると解説する。このことを踏まえて、トマスは (a)「類」(b)「附帯性」による先行的理解の可能性を神と被造の非質料的諸実体とのそれぞれについて検討する。

(a1) 神については「何か或る最も近い類あるいは遠い類を認識することによって」先行的理解を得ることはできない。それは、神がいかなる類のうちにもないためである。すべての「類」には「存在 esse」とは別に「何である quid est」をもつことが

必要とされるが、神はその「存在 esse」とは別の「何である quid est」をもつのではないからである。

(a2) 他方、被造の非質料的諸実体の方はたしかに類のうちにある。ここでトマスは被造の非質料的諸実体に対する論理的アプローチと自然学的アプローチとの相異を論じる。

すなわち、「論理学的に」考察すれば、被造の非質料的諸実体は可感的諸実体と「実体」という遠い類においては一つになる。論理学者は、「ただ端的に概念を考察するのであり、概念としては、非質料的なるものが質料的なるものと、不滅なるものが可滅なるものと一つであることは何ら差しつかえない」。

しかし、「自然学的に」言えば、被造の非質料的諸実体は可感的諸実体と同一の類として一つになることはない。可滅的なものと不滅なものとは一つの類に属さないがゆえに、天体もこの下位の諸物体と類的に同じではないのと同様である。論理学者とは異なり、自然学者と第一哲学の探究者は、諸々の本質を「諸事物において現実に存在すること esse in rebus」ということに即して考察するので、「可能態」と「現実態」とのさまざまな様態に着目し、その様態の多様性に応じて「さまざまな異なる類がある」と言う。

(b1) ところでまた、神は何か或る附帯性をもつこともない。

(b2) 他方、他の非質料的諸実体については、もしそれらが何らかの附帯性を有していたとしても、それらの附帯性は、「我々には知られてはいない」。

以上 (a1) (a2) (b1) (b2) から、非質料的諸実体が、混然

とした認識の形で、類と諸々の現象する附帯性との認識を通して人間に認識される可能性は否定される。

(a)¹そしてトマスは、これらの諸実体についての先行的な認識として、我々は「類の認識」の代わりに「諸々の否定を通しての認識」をもつ、としている。例えば、こうした諸実体が「非質料的」「非物体的」なものであり「形姿をもたない」など、その他こうした否定的なものであると知る場合である。こうした否定的認識を積み重ねれば重ねるほど、我々がそれらの諸実体についてもつ認識は曖昧さの少ないものとなる、と言う。それは、「ちやうど遠い類が諸々の種差（相異）によって限定され規定される」のと同様に、「より先の否定は後続の諸々の否定によって限定され規定される」からである。

(b)²またトマスは、神および被造の非質料的実体については、諸々の附帯性の代わりに、「因果関係」または「超出という関係」として、可感的諸実体に対するそれらの関わりを我々は知っている、と指摘する。

以上のようなわけであるから、諸々の非質料的形相については、我々は、(1)「在るか」を認識し、またそれらについて「何であるか」の認識の代わりに、(a)「否定」によって、また(b)「原因性」と「超出」によって得られる認識をもっている、とする。そしてトマスは、ボエティウスのテキストを「神的形相そのものはあらゆる表象像を排除して考察されるべき」であり、「神的形相については何であるかは知られることがない」と考えているものとして解釈している。

すでに第一問題において、神についてその「何であるか」は否定的な形でしか知られえず、ただ「在るか」のみが知られると結論づけられていた。しかし本項ではさらに一步を進め、「在るか」という認識はその主語となるものの「何であるか」について、少なくとも「混然とした認識という仕方」においてせよ何らかの先行的理解が不可欠であることを指摘し、その先行的理解の成立可能性を問題としている。

すなわち、通常の認識において、「類」および「附帯性」にもとづいてなされる「混然とした認識という仕方」による先行的理解の可能性が、「神」と「被造の非質料的諸実体」とのそれぞれについて適用できるか、という角度から検討を行なう。そして、結論として神を含む諸々の非質料的形相については、我々は、(1)「在るか」を認識し、またそれらについて「何であるか」の認識の代わりに、(a)「否定」によって、また(b)「原因性」と「超出」によって得られる認識をもっている、としている。

(四) 神的形相を透察することは、何か或る観照的学を道として可能であるか⁽⁹⁾。

最後の第四項では、「神的形相を透察すること」が何らかの観照的学によって可能であるかが問われているが、人間における観照的学の限界が明らかにされている。

観照的諸学において命題を論証したり定義を見出したりする際には、常に「何らかのより先に知られているもの」に基づいて考察が進められる。例えば、「前もって知られている諸々の命題」に基づいて「結論の認識」に、また「類」と「種差」と「事物の原因」とを概念的に把握することによって「種の認識」に到達する。

しかし、ここで無限に進むことは不可能である。従って、観照的諸学の行う考察はすべて、諸々の「何か或る第一のもの」に帰着する。こうした「第一のもの」について人は学が必要も発見する必要もなく、むしろそれらについては「自然本性的に知」をもっている。例えば、「全体はすべてその部分よりも大きい」などといった、「それ自体論証不可能な論証の諸原理 *principia demonstrationum indemonstrabilia*」であり、これらの原理に諸学におけるすべての「論証」が還元される。また、例えば「在るもの」といった知性の第一の基本的諸概念もまたこうした「第一のもの」であり、先述の諸学の「定義」はすべてこれらの基本的諸概念に還元されなければならない。

以上から、「論証」という途によっても、「定義」という途によっても、諸々の観照的学において知られるのは、ただ「自然本性的に知られるもの」の及ぶ範囲に止まっているということが示唆されている。

ところで、こうした「自然本性的に知られるもの」は、人間には能動知性の光によって明らかにされるのであるが、この光によって我々に明らかにされるのは、この光を通して「表象像」

が現実には可知的なものとなる限りにおいてである。ところで、表象像は感覚から受け取られる。従って、先述の諸原理の認識は「感覚」と「記憶」から始まる。それゆえに、かかる諸原理は、感覚によって把握されることがらをもとに我々が認識を得ることができるようなことがら以上のものに我々を導くということはない。

ところで、第三項で明らかにされたように、諸々の分離実体の「何性」は感覚から我々が受け取るものを媒介として認識されるということは不可能である。従って、観照的学のいかなるものによっても、分離実体について「何であるか」は知られない。ただし、観照的諸学によって、それらの実体が「在ること」、またそれらの実体について、例えば「知性的である」「不可滅である」といった何らかの在り方については知りうるが。

最後にトマスは、「可感的諸物の何性は諸々の非質料的何性を十分に現し出す」と考えていたアヴェンパーケを名指して批判を加えている。

「論証」と「定義」によるところの、人間が有しうる観照的学において知られるのは、ただ「自然本性的に知られるもの」の及ぶ範囲に止まっており、「自然本性的に知られるもの」は人間にとっては能動知性の光が感覚に由来する表象像に依存する、という限界性のもとにあることがあらためて明らかにされ、観照的諸学によって、神を含む非質料的な実体についてはそれらが「在ること」、またそれらの実体について、例えば「知

性的である」「不可滅である」といった何らかの在り方のみが知られうる事が再確認されている。

【5】 結語

筆者は、トマスの学問論を解明するために、EDCの意義を検討する一連の論放を企図している。本稿では、特にトマスが「神学」の方法をどのように特徴づけたのかを検討するために、彼の学問方法論が展開されている第六問題を取り上げた。本稿の扱う第六問題は、第五問題において明らかにされた「自然学」「数学」「神学的」という観照的学の区分を受け、また、ボエティウス自身のテキストにおける方法論的な言葉に解説を施しつつ、これら諸学におけるトマス自身の方法論的な見解を明らかにしている。

第一項では、「自然学的なものについては推論的に *rationabiliter*、数学的なものについては学習的に *disciplinativer*、神的なものについては直知的に *intellectualiter* 取り扱わなければならない」というボエティウスの言葉に導かれ、これら諸学の探求方法が包括的に扱われており、それぞれの学について半ば独立した小項が立てられる形で論が進められていた。

トマスはまず、自然学の方法として言及されている「推論的 *rationabiliter*」探究方法を「理性（推論）的能力 *potentia rationalis* からして」「すなわち「理性的魂 *anima rationalis* に固有の仕方に従う」探究という意味に解する。

ただし、注目しておきたいのは、「推論的に探究を進める」ことは排他的な意味で「自然学にのみ適う」とはしていない点である。トマスは「推論的」探究の進め方を「理性的魂に固有の仕方に従う」ものとして提示し、「推論的」な理性というものが人間の自然本性そのものに固有であることを強調している。人間的な自然本性および認識に対するこうした見方は、第一問題でトマスが示した立場の背後に常に窺われた彼の経験主義的な認識論を反映している、と言える。

ボエティウスが数学に帰する「学習」という方法は、確実な認識に適合する。数学は自然学と神学のどちらよりも確実であるとされるが、ここでトマスは、観照的諸学における「確実性」の問題を明らかにしている。運動と質料を捨象している数学は、運動と質料に関わっている自然学における考察よりも確実であるとされる。また、我々の認識は可感的事物から始まるがゆえに、可感的事物からより遠く隔たっているものに関わる神学よりも、数学は確実であるとされる。ここでも、人間の認識が感覚に基礎を置いているという点が問題となり、相対的に感覚的・物質的世界における運動と質料を捨象した数学が「より確実」とされているのである。

トマスは、「直知的に」探究を進めることが神学的学に帰属させられるのは、この学において最も顕著に「知性」の方法が看取されるからである、と言う。ここでトマスは「理性」と「知性」「分析還元の道」と「結合の道」の相違と関係とを明らかにしている。つまり、「分析還元の道」においては「直知的知

性による考察」は「推論的理性による考察」の終局であるが、「結合の道」においては、「直知的知性による考察」は「推論的考察」の出発点である、という関係にある。神の学知は「分析還元の道」によって推論を進める「理性」による考察にとって終極であるとともに、「結合の道」においては「推論的理性による考察」の出発点である、ということで「知性的」である、というわけである。

第二項では、学知を獲得する際における「感覚」と「表象ないし想像力」の役割を検討している。考察の範囲は神の学にとどまることなく、自然学・数学の位置づけにまで及んでいる。諸学についての結論は、「神のことがら」に関しては、我々は表象力にも感覚にも向かつてはならず、「数学的諸学」においては、表象力には向かうが、しかし感覚に向かつてはならず、「自然的諸学」においては、感覚にもまた向かわなければならない。その上でトマスは「観照的学知のこれら三つの部分に関して同じ方法で探究をしようと努める者は、誤りを犯す」と警告している。

第三項では、すでに第一問題において与えられていた、神についてその「何であるか」は否定的な形でしか知られえず、ただ「在るか」のみが知られるという見解から、さらに一步を進め、「在るか」という認識はその主語となるものの「何であるか」について何らかの先行的理解が不可欠であることを指摘し、その先行的理解の成立可能性を問題としている。通常の認識において、「類」および「附帯性」にもとづいてなされる先行的

理解の可能性が、「神」と「被造の非質料的諸実体」とのそれぞれについて適用できるか、という角度から検討を行ない、結論として神を含む諸々の非質料的形相について、我々は「在るか」を認識し、またそれらについて「何であるか」の認識の代わりに、「否定」および「原因性」と「超出」によって得られる認識をもっている、としている。

最後の第四項では、「論証」と「定義」によるところの人間における観照的学の限界が明らかにされている。人間が有する観照的学において知られるのは、ただ「自然本性的に知られるもの」の及ぶ範囲に止まっており、それは能動知性の光が感覚に由来する表象像に依存する、という限界性のもとにあることがあらためて再確認されている。

トマスはこの第六問題において、自然学・数学・形而上学の方法の相違を明らかにしている。基本的に彼は「従来の新プラトン主義の哲学を援用した神学や論理的な神学へのアプローチを批判」し、彼の経験主義的な立場からこれら観照的諸学の方法を整理し直した、と理解することができる。

注

(1) テキストとしては以下の版がある。

Sancti Thomae de Aquino *Opera omnia* iussu Leonis XII P. M. edita, t. 50, Roma / Paris 1992, pp. 136-171. (ハオ版)
Sancti Thomae de Aquino *Expositio super librum Boethii De Trinitate* : ad fidem codicis autographi nec non ceterorum

codicum manu scriptorum recensuit Bruno Decker, Leiden : E.J. Brill, 1959. (デッカー版)

S. Thomae Aquinatis *Opuscula theologica*, vol. II : De re

spirituali, cura et studio Raymundi M. Spiazzi, accedit

Expositio super Boethium De Trinitate et De hebdomadibus,

cura et studio M. Calcaterra, Marietti, Torino / Roma 1954 /

1972, pp. 361-389. (ペリヒミナイ版)

Thomas von Aquin, *In librum Boethii De Trinitate*

quaestiones quinta et sexta. Nach dem Autograph cod. Vat.

lat. 9850 mit Einleitung herausgegeben von Paul Wyser,

Fribourg / Louvain 1948. (ヴァイザー版)

邦訳としては

長倉久子訳註『トマス・アクィナス神秘と学知―『ボエ

ティウス』三位一体論』に寄せて『翻訳と研究』、創文社、

一九六六

なお、テキストの訳文は基本的に上記長倉訳に依拠する

が、必要に応じて適宜改変をほどこす。また、筆者自身に

よるテキストの引証は研究者がよく依拠するデッカー版に

よる。

長倉前掲書 p.58

EBT, prologus

長倉前掲書 p.58

EBT, expositio capituli secundi, デッカー版 p.157 長倉前

掲書 p.145-146